

総合教育研究センター

学生向け情報誌

クレードル

第16号

# CRADLE

Center for Research And Development of Liberal arts  
Education

16th issue

# 「森に生きる」 川上村の16年

総合教育研究センター 伊藤義之

森に行って合宿生活をしながら荒れた森を健全にする授業を作ろう！

そんな構想が出てきたのが2003年のこと。大学から車で1時間あまりの奈良県吉野郡川上村に実習林と宿舎の提供を受けて2004年に授業が始まり、今年の夏が「森に生きる」の16回目でした。

すべての学部の全学年プラス卒業生も参加OKのこの科目。今年も4学部の全学年から参加申し込みがありました。部活などの日程が重なってしまった人たちは不参加となってしまいましたが、何人かの卒業生や、さらにこの授業で知り合って結婚した卒業生が子連れで手伝いに加わるなど、賑やかな合宿となりました。

2004年の第1回目からすべてに参加してきた筆者が16年間に振り返ります。



(所属・学年は当時)

CRADLE(クレードル) 第16号 2019年10月発行

発行者 伊藤義之 天理大学 人間学部 総合教育研究センター

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

電話 0743-63-7092 (内線) 6111

p. 1~p. 3

「森に生きる」川上村の16年

p. 4

大学のキャンパスで歴史を感じる  
経験を

## 最初はほんのお手伝い感覚



第1回の参加者+池田先生、水本先生、筆者

「森に生きる」という授業を始めるので誰か担当してくれる人はいませんか。」当時の総合教育研究センター長の呼びかけに「夏は暇だし、山歩きも嫌いではないし、やってみようかな」と手を上げた私。主担当の池田士郎先生（実習林や宿舎を提供してくれる川上村の水本さんの知り合い）のお手伝いをしようか、程度の気持ちで参加することにしました。3年目からは私が主担当になり、そこから十数年も続けて担当していくことになるとは全く思っていませんでした。初年度は新規開講科目ということで1年次生しか取れないとの事情もあり、1年目の参加者は男子2名、女子2名の4名のみでした。しかも初日、前日の台風の影響で川上村に入る寸前で道路が閉鎖。土砂崩れは宿舎の少し先の地域だということで何とか通してもらいましたが、断水となりわき水を汲んで浴槽にバケツリレーをするなど、先行きが思いやられる第1回目となりました。第2回目も参加者は1年次生4名のみでした。

## 3年目のブレイク



第3回の参加者+水本先生、ご両親、池田先生、筆者

3年目になり、参加可能学年が3学年に広がったこともあって、参加者は一気に倍増し、その後はコンスタントに10名以上となりました。当時は宿舎を提供してくれている水本先生のご両親も健在で、夏の4泊5日の時期だけ、学生と同居する形をとっていました。ご両親はその後亡くなり、現在は空き家となっている宿舎を夏の間だけ使用させていただいています。4年目にはリピーターが4名も参加し、一気に12名の参加となりました。現在「森に生きる」はA、B、Cの3科目に分かれ、3回参加すれば1単位×3の3単位が取れるようになっていますが、当時は1科目しかなくリピーターたちは単位ではなく実習の楽しさや水本さんご夫妻の

人柄に惹かれての参加でした。

## 歴代の学長も参加

「森に生きる」を始めたときの学長、橋本先生は第1回目の合宿に先立って現地に来ていただきました。2010年には学長が飯降先生に代わりその年の夏に早速飯降先生を現地にお招きし、学生達の活躍の様子を視察していただきました。3年前に新たに学長に就かれた永尾先生にもその年の夏には



第7回の参加者（前列中央が前学長の飯降先生）

お越しいただき、実際に林業体験をしてもらっています。そのほかこれまで、副学長だった大橋先生や岡田先生をはじめ、多くの大学教職員の方々にもお越しいただいています。この活動は世間にも徐々に知られるところとなり、奈良テレビ「タどきっ」や天理時報からも取材を受け、奈良新聞などのメディアにも取り上げられました。

## 2011 年度からはオーストラリア版も始まる

年を追って盛んになる「森に生きる」の成功を受けて、当時の言語教育研究センターが行っていた「オーストラリア短期語学研修」と「森に生きる」をコラボさせる話が言語教育研究センター長から持ちかけられました。筆者は早速オーストラリアでどのような形で「森に生きる」ができるのかを視察に行き、天理教オセアニア出張所の当時の足立所長の仲介で現地クイーンズランド州政府の森林保安局の協力を得て活動ができることになりました。研修の前半を語学研修、後半を「森に生きる」とすることで計画が固まりました。

オーストラリアコースは1年目は新規入学生のみでの参加ということでごく少ない人数で始めましたが、参加者は徐々に増え、来年2月に実施される第9回目のオーストラリア短期研修には12名が参加します。

「森に生きる（オーストラリアコース）」はこちらから学生を連れて行く授業ですが、何年前前には向こうで我々の活動を指揮してくれている森林保安員（レンジャー）が2名、川上村の「森に生きる」に特別参加してくれました。こうして日本とオーストラリアの絆はますます深まっています。

## ますます盛んに

これまで「森に生きる（吉野版）」と「森に生きる（オーストラリアコース）」の両方の担当者として、また総合教育研究センターのセンター長として関わってきた筆者ですが、来年3月でリタイアを予定しており、それぞれの「森に生きる」に正式に関わることはなくなります（ボランティアとしての参加はできれば続けたいと思っています）。「建学の精神」実践科目としてこれまで継続できたのも興味を持ってくれた学生がいてこそですが、また陰ひなたに支えてくれた多くの関係者の協力があった初めて成功させることができました。この場を借りてお礼を申し上げます。今後筆者は支える側にまわりますが、後を継いでくださる方々にはさらに2つの科目を発展させ、「天理大学に『森に生きる』あり」とより広く世間に知らしめて欲しいと願っています。

余談ですが、今年の合宿が終わった翌日、毎年行っているゴミ回収をしに一人で宿舎に行ったところ、そこには歴代の参加者らが大勢集まっ

てくれていて、サプライズで「伊藤先生お疲れさまパーティー」をしてくれました。「森に生きる」がみんなから愛されていることを実感し、感動したできごとでした。



レンジャーのブラッドさんと参加者



# 大学のキャンパスで歴史を感じる経験を

総合教育研究センター 山本和行

みなさんが学んでいるこの「大学」という場所には、その大学の歴史や、その大学の置かれた環境・社会状況を映し出すような建物やモニュメントがたくさんあります。

たとえば天理大学であれば、1号棟の建物や天理大学附属天理図書館の建物は戦前に建てられたもので、当時の建築技術によって生み出されたその時代の建築様式を今の時代にも伝えています。こうした建物は建物としての機能以上に、「そこに存在しつづけている」という事実そのものに存在価値があります。約90年間、大学の歴史とともにあり続けているということによって、こうした建物は「歴史的建造物」としての価値を持つようになったといえます。

このように大学そのものの歴史や、その大学を取り巻く社会の状況を物語るようなモノは、日本の大学だけではなく、世界中に存在します。

僕が足を運んだ海外の大学で印象深かったモニュメントは、香港大学の食堂前にあるモニュメントです。

香港のみならず、世界のなかでもトップクラスの研究・教育をおこなっている香港大学のなかに建てられているこのモニュメントは、台座のところに「六四屠殺（屠殺）」と書いてあります。

これは今から30年前、1989年6月4日に中国・北京で発生した「天安門事件」の犠牲者を追悼するモニュメントなんですね。

そうしたモニュメントが香港大学の中にある意味をここで詳しく解説することはできませんが、ニュースなどで報じられる今の香港をめぐる状況を思い起こせば、このモニュメントからは非常に深い意味を感じることができます。

香港に友人がいる僕は、このモニュメントと今の香港の姿を見るにつけ苦しい気持ちになりますが、それでもこの姿をきちんと見続けておかなければならないなと感じています。

こうしたモノを目にしたときに、イメージーションを膨らませるような経験をみなさんにもしてもらえたらと思います。

